

# NORDIC BOOK REVIEW 2019

北欧語書籍

翻訳者の会

書評集

# NORDIC BOOK REVIEW

A

A 面 北欧語書籍翻訳者の会 書評集

## 未邦訳書から見る北欧社会

1 - 62

- ◆女性が安心して自分自身でいられる世界をめざして
- ◆マイノリティの中のマイノリティ
- ◆個人的な記憶が掘り起こすもの
- ◆わたしは今はどこにいる
- ◆君たちの人生のABC
- ◆詩 シューアン・ウルリック・トムセン / ベニー・アナセン
- ◆立ち上がって「ノー」と言う、その方法はいくらかでもある
- ◆デンマークの影の文化史
- ◆社会階級の間を旅した男
- ◆強制結婚させられた青年の苦悩
- ◆北欧の先住民族サーミ、その沈黙の風景
- ◆詩 マリアンネ・コルーダ・ハンセン
- ◆マダムC
- ◆オトちゃんがスウェーデンに生まれていたら…?

## 北欧ブッククラブのご案内

63

B 面 北欧語書籍翻訳者の会 活動レポート 2019 (※反対側からお読みください)

# KULTURRÅDET

当冊子の発行はスウェーデン文化庁 Kulturrådet の助成と柳沢由実子さんのご寄付を受けて実現しました。

# 未邦訳書から見る北欧社会

## テーマ「ダイバーシティ」

私たちは書籍翻訳者として、普段は刊行予定の本を翻訳をしたり、出版社に邦訳出版の企画を持ち込んだりしています。

けれども、何らかの理由でなかなか邦訳されない本にも、魅力が詰まったものがたくさんあります。そこで私たちは、未邦訳書の書籍を通じて北欧社会を描く、というプロジェクトにチャレンジしてみました。

第1弾のテーマは「ダイバーシティ」。多様性を尊重するという北欧社会の目的は、どのように、あるいはどれくらい達成されたのか、現在抱えている問題点は何なのか、これから紹介する作品を通して感じていただければ幸いです。

## 女性が安心して自分自身でいられる世界をめざして

スウェーデンを代表するボディー・アクティビストがつづる「この体の歴史」

ヘレンハルメ美穂

著者のステイーナ・ヴォルテルは画家、ラジオパ  
ーソナリティー、テレビタレント。近年はインスタ  
グラムでのボディー・アクティビズムが注目を集め  
ていて、フォロワーの数は十八万人以上に及ぶ。ス  
ウェーデンの人口が一千万人を少し超える程度であ  
ることを考えると、なかなかの数字だ。

本書は、そのヴォルテルが、自らの体をめぐるさ  
まざまな経験や思いをつづったエッセイ集である。

ボディー・アクティビズムは、日本ではまだ聞き

慣れない言葉かもしれない。スウェーデンのオンラ  
イン百科事典 *Nationalencyklopedin* では、この  
ように定義されている。

「ボディー・アクティビズム (Kroppssaktivism)  
さまざまな体形が社会に受け容れられることを  
めざして、規範的な美の理想に抵抗する活動」

ヴォルテルの母は女優だったが、すらりとした体  
形を保つことに固執し、次女ステイーナのふくよか  
な体を嫌っていた。長女ユルヴァは拒食症で亡くな

っていて、その悲痛な顛末も本書に記されている。不自然な美の規範が姉を殺したのであり、「これは命にかかわる問題だ」とヴォルテルは言う。

彼女はある日、キッチンで音楽をかけて半裸でひとり踊っているところを自分で撮影し、インスタグラムに投稿した。体を動かすこと、自分が自分であることを、ただ楽しんでる映像だった。この投稿が広く拡散され、多くの人々の共感と賛同を集めた。

「私が思春期だったころに、私みたいな人がゴールデンタイムにスパンコールのドレスを着て踊っているところを、テレビで見られたらどんなによかっただろうと思う。姉もそういうものを必要としていたはずだ」（九十八頁）

だが、寄せられたのは好意的なコメントばかりではなかった。「見苦しい」「恥を知れ」などの声。半裸で踊っているというだけで、男性からは「裸の

写真を送れ」「寝てやってもいい」などとわれわれ、男性器の写真が送られてくる。女性からも「五十歳を超えているのにみっともない」「だれも見たくない」「もっと痩せたら？」などといった声が少なからずあがった。

いったいなぜか、とヴォルテルは問いかける。女性が自分の体を肯定して楽しんでいる姿をソーシャルメディアに投稿するのは、かならずしも男性を誘うためでもなければ、人の批評を求めるためでもないはずだ。女性の体は、ひとつの人格、独自の意思を持った、その女性自身のものではないのか？なぜつねに品定めされ、不要な意味づけをされ、非人間的な規範を押しつけられるのだろうか？

女性の体がその女性自身のものとして尊重されない傾向は、性暴力の問題にも直接つながる。ヴォルテルは #MeToo にも言及し、彼女が十代のころからさらされてきた性暴力について赤裸々に語ってい

る。氣力を消耗するたいへんな作業だったはずだ。それでもこれからの世代のため、女性が安心して自分自身でいられる場所をつくるため、声をあげていかなければならないし、耳を傾けてもらわなければならない、とヴォルテルは説く。

テーマは上記以外にも多岐にわたる。母との関係、ラジオパーソナリティーになった経緯、アート、母との和解、自ら母親になったこと……ときおり詩的な美しさもみせながら、適度にくだけていて温かみのある、著者の声が聞こえてくるような文体は、芸術家でありラジオパーソナリティーでもある彼女ならではかもしれない。ここにつづられているのは、ステイーナ・ヴォルテルというひとりの人間の体の歴史であり、その体が生きた人生の歴史だ。

体というものに投影される、あらゆる規範、幻想、思い込みを取り払ってみれば、残るのは「人はその体を通じて生きている」という単純な、しかし奇跡

のような事実である。自分の体を肯定することは、自分の人生を肯定することにほかならない。それができれば、他者の体を、その人生を尊重することもできるはずだ。

あらゆる意味で多様性の根底にあるのは、このシンプルな原則なのではないだろうか。自己を肯定すること、他者を尊重すること。自分や他者を見る自分のまなざしを問い直すこと。体という、だれもが持っている、目に見えるわかりやすいところから、多様性を考える。そのヒントと力を与えてくれる一冊だ。

ダイバーシティ、多様性、というと、なにやら大仰でよくわからないコンセプトと思われるかもしれませんが、じつは人として生きているならだれにでも関係のある話ですよね。人はひとりひとり違うのですから。

(ヘレンハルメ美穂)



- 原語タイトル Kring denna kropp
- 仮タイトル この体をめぐって
- 著者名 Stina Wollter  
スティーナ・ヴォルテル
- 言語 スウェーデン語
- 発表年月 2018年9月
- ページ数 270ページ
- 出版社 Bokförlaget Forum

## マイノリティの中のマイノリティ

ムスリムとして、そして同性愛者として生きること

種田麻矢

『千一夜物語』の語り手と同じ名前を持つ十七歳の女の子シエヘラザード（通称シー）が主人公のヤングアダルト小説。ある移民家族の物語だ。シーの両親はトルコ出身のムスリムで、現地の情勢悪化により当時七歳のシーを連れてデンマークに移住する。シーは一人っ子で、両親に愛され、期待されている。シーのことを「将来へ向かう私たちの弓矢」と呼ぶ父は、心的外傷後ストレス障害（PTSD）で入院し、シーが医者になることを望む母は夜勤をしている。そんな両親を支え、彼らの期待に応えるために、シーは真面目で勤勉なムスリム女子であろうと努力

する。書くことが好きで、暇さえあればZINE（同人誌）を作っている。

ある日、父親の入院している病院で、ティアというブロンドの女の子に出会う。ティアの母親も、癌で入院している。ふたりは徐々に距離を縮め、お互いに惹かれ合い、やがて恋人同士になる。

親の期待や、自分に根付いている文化や宗教を大事にしたいと思う気持ちと相反し、ティアへの想いが抑えられず、シーは苦悶する。ある日、ふたりは



キスをするが、その出来事にシー自身が混乱する。女子同士がキスするなんてあり得ない。それなのに、浮かんでくるのはティアのことばかり。

デンマーク人が多数派の高校に通うシーは、学校側のシーへのあからさまな特別扱い——課外活動での豚肉抜き食事や男子禁制の寝室など——や、クラスメイトのオープンすぎる会話に困惑する。セックスしたことあるの？ どこでヤツたの？ どうだった？ ムスリムの女子は、結婚するまで「清純」でいなければいけない。シーの家ではセックスどころか、からだの話さえ話題にならない。初潮が訪れたときも、母にさえ相談できなかった。ただ翌朝、血のついたベッドシーツを発見した母が、無言で生理用ナプキンをトイレに置いただけだった。

本書では、文化の衝突の他に、イスラム社会における抑圧や干渉、公序良俗、並行社会、また、処女膜“再生手術の問題などのタブーやダブルスタンダ

ードに触れている。

ひとりの読者として特に深く考えさせられたテーマは、同性愛を嫌悪するイスラム社会の中で生きる同性愛者、いわばマイノリティの中のマイノリティだ。イスラムの教えでは、同性愛は重大な罪であり「病気」でもある——少なくとも本書の中では。シーのように「異常な」性的指向を持ち、文化／宗教の規範に挟まれ苦しむ若者のムスリムの存在は、実際デンマークのメディアで少しずつではあるが取り上げられるようになってきた。

彼らは親や身内に告白することを恐れ、ひとりで苦しんでいることが多い。告白すれば、家族に縁を絶たれるか、周りから後ろ指を指される。この「後ろ指を指される」ということわざに相当するものが、シーの文化にも存在し、本書のタイトルでもある。すなわち、社会規範から外れたふるまいをすると、集団で「ひと差し指の先っぽ」で追い詰められ、非難される。

クリスチャンの母とムスリムの父を持つ作者は、ソーシャルワーカーとして働き、性の悩みを抱えたり、性的暴行を受け、誰にも告白できずにいるムスリムの若者たちを支援した経験を持つ。また国立病院の性暴力救済センターで勤務した経験もある。このような作者の体験を元に描かれた本書は、保守派が喜びそうな内容であり、イスラム社会に対する偏った印象を与える恐れがあるが、作者は次のように述べている。

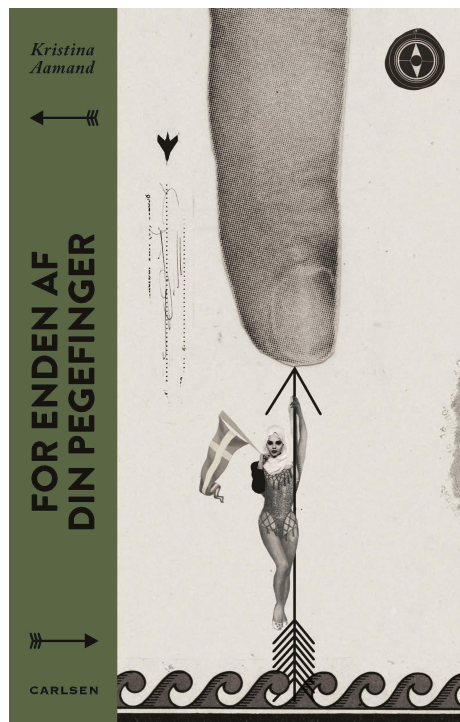
政治的な議論で悪用されがちなテーマについて執筆しているとき、いつもジレンマに陥ります。不都合なことは隠すべきか、それとも本で取り上げるべきか。それらを天秤にかけたとき、いつも頭に浮かぶのは若い世代です。彼ら自身が抱えている困難について書かれた本を図書館で見つけられるようにしたい。

〈ウェブサイト [dog.dk](http://dog.dk) でのインタビューより〉

本書は二〇一六年度 Carlsen 社ヤングアダルト小説新人賞を受賞した。

家族との繋がりが、恋人か、どちらかを諦めなくてはならない苦しさ。異性愛規範が根付く社会で暮らす性的マイノリティは、引き裂かれるような苦しさを味わっています。一部のムスリムの同性愛者もそのひとりです。

(種田麻矢)



- 原語タイトル For enden af din pegefing
- 仮タイトル ひと差し指の先っぽ
- 著者名 Kristina Aamand  
クリスティーナ・アーマン
- 言語 デンマーク語
- 発表年月 2016年11月
- ページ数 257ページ
- 出版社 Carlsen

## 個人的な記憶が掘り起こすもの

パンクなコミック作家が描く一九八二年、スウェーデンの冬

よこのなな

初めてスウェーデンに足を踏み入れた一九九〇年代半ば、マンガについての記憶はない。それから五年ほど後、二〇〇〇年代の初め、擬人化されたオスのイヌが主人公の四コマが人気だったが、かわいめの絵柄でかなりマッチョな世界観が広がっていた。スウェーデンのマンガってこんなものしかないのか、と思っていた。それから数年後、北極圏で中学生に言われた。「読んでるんだ、ドーンシ」え、DOJNSHI、つまり同人誌?! 小さな書店にも日本のマンガが並んでいた。マンガ文化が変わってきている?! それからさらに十年。日本のマンガに

憧れて来日したスウェーデンの作家がいる一方、スウェーデンでは女性の作家が活躍し、幅広い作品が出版されている。日本でも二〇一八年に、リーヴ・ストロームクヴィストの『禁断の果実』が翻訳出版され、話題を呼んでいる。

一九七九年生まれの人気作家であるストロームクヴィストが、インタビューで名前を挙げていた数少ない女性のパイオニア、それが本書の著者ココ・ムーディソンである。ココは一九七〇年生まれ、二〇〇二年にデビューしている。

主人公は、もうすぐ十三歳になる女の子ココ、舞

台は一九八二年十二月のストックホルムである。ココと親友のクララは九歳のときにフォークダンスのレッスンで出会い、すぐに意気投合して仲良くなった。そしてクララの姉マチルダも加わえた三人でバンドをやるうと思いい立ち、楽器を買おうと奮闘する。ある日、ココの姉が持っていたTHE CLASHのレコードを聴いた三人は「パンクしかない！」と思いい、髪を切り合ってツンと立て、パンクロッカーとなる。それでもバンドをやるには楽器もないし、お金もない。そもそも楽器を弾けるわけでもない。情熱があればパンクはやれると信じ、楽器を借りてどうにかバンドを始めた三人だが、人生はなかなかうまくいかないのだった——。

というような形で、音楽と友情、恋への憧れを中心に、少女たちの一ヶ月ほどの悲喜こもごもを描いた本書は、作者の自伝的要素の強い、瑞々しさにあふれた、しかしなかなかシビアで苦い青春日記のような作品である。

日本のマンガに慣れた目で見ると、ムーディソン

が描く絵は勢いがあるが、非常に個性的である。誰だって語るに足るものを持っている。だから、特段テクニクがあるわけじゃないけどわたしも語りますよ。一見そんな感じを受ける。だが、よく練られた画面構成、巧みなストーリー展開で読者を一気に引き込んでいく確かな実力がある。

本書ではさまざまな対比が描かれる。たとえば、ラブソングとプロテストソング。たとえば、市街地と郊外。男子パンクバンドが住む郊外の団地で、市街地出身のココたちは「いかにも郊外だね」とつぶやくものの、エレベーターに驚き、高層階からの眺めに感嘆する。郊外男子たちは、街の石造りのアパートを「古くさい」と揶揄しながらも、案内された屋根の上は確かに居心地がいいと言う。

登場する家族もさまざまだ。ココの両親は離婚している。恋多き母親は、普段は娘たちがひとりりて食事をしていることに気付いてもいない。けれども、別れた夫が来たときだけは家族全員での食事や散歩にこだわる。家族が集う日であるクリスマスイブ、

ココの家では行き場のない大人たちが集まったパーティーが開かれる。ココの母親の友達であるゲイのカップルにクララは驚くが、ココにとって彼らはごく自然な存在だ。

価値観の違いも示される。平等でよりよい社会を目指す活動に参加するココやクララは、クラスでも街中でも浮いた存在だ。一方、チエーンを巻き付け「くたばれ、ブレジネフ、レーガン!」と叫ぶパンク男子は、「ブレジネフはもう亡くなってるよ」と言われても「あ、知らなかった」くらいしか言わない。ファッションパンク上等。そして彼らはモテて、ココはおそろしくモテない。

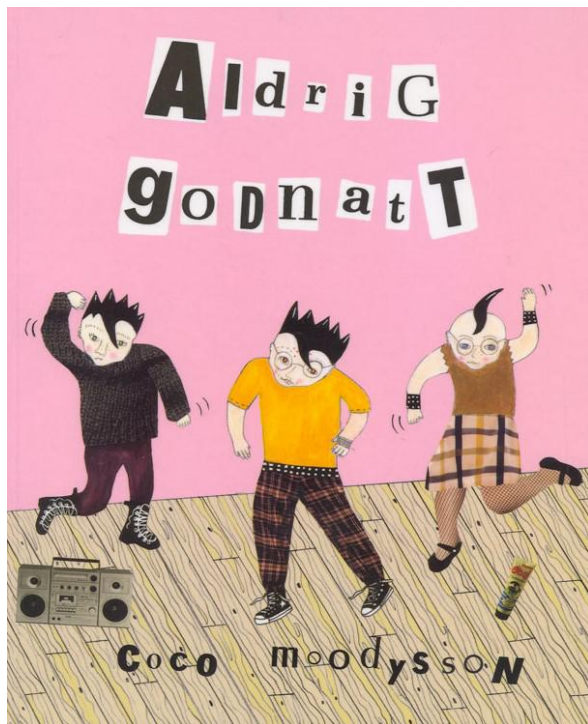
本書はごく個人的な青春録のようでありながら、スウェーデン社会の歩みを捉え直す試みとしても読むことができる。社会変革の大きな流れがあった時代が終わったが、ココの母親たちの行動はまだまだヒツピーめいている。でも世間ではどこかシニカルな空気が流れている。福祉国家のスウェーデンでも一九八二年末という時代の空気はこんなだったのか、

いやもしかしたら七〇年代だって実際はこんなふうだったのかもしれない、という気さえしてくる。

同時代を過ごしていても同世代であっても、興味や関心、住む場所などによって、見えている世界と違うのはかくも違うものだ、ということを書き教えてくれる。作者の好きな世界、よしとするものはつきりと見えてくる一方、その周りにいる他者や異なる価値観の存在も浮かび上がってくるのである。そこが違いを尊重する北欧らしいのではと、わたしは思う。

ちなみに本書はココの夫ルーカスにより、設定の若干の変更を加えて二〇一三年に映画化されている。映画版タイトルは「ウィー・アー・ザ・ベスト」、東京国際映画祭でグランプリに選ばれたものの、日本での一般公開はされていない。

ムーディソン  
監督作品は、本作を含め3作目以降は日本では一般公開されていません。『ミレニアム』でも言及された社会派作品など、今からでも公開してほしい！  
(よこのなな)



- 原語タイトル Aldrig godnatt
- 仮タイトル おやすみなさいなんて言わない
- 著者名 Coco Moodysson  
ココ・ムーディソン
- 言語 スウェーデン語
- 発表年月 2008年8月
- ページ数 208ページ
- 出版社 Kartago Förlag

## わたしは今はどこにいる

スウェーデン発、エキセントリックな女性の独特の時間の感覚、他人との距離感

久山葉子

眠りにつくのは、この世でいちばん当たり前のことのようにも、世界いち難しいことのようにも思える。自分というすべてを脇にやり、身体から意識が消えるがままにする。この身体が自分のものではなくて、一時的に借りているだけみたい。それは死ぬ練習のような感じもする。しばらくするとソフィアもやってきてベッドに横になった。そして服を着たまま眠ってしまった。

わたしは指輪のなくなった自分の薬指を見つめた。肉と骨。それだけ。わたしは手を伸ばし、ソフィアの顔に触れ、額の皮膚の下にある頭がい骨を感じた。

これは人間。それ以上の何物でもない——。それがわたしの心の拠りどころなのだ。

これが、『わたしは今はどこにいる』（仮題）の最後の十二行だ。主人公エリースの視点で綴られるこの作品は、どのページをめくっても、エキセントリックな主人公の感性が息苦しいほどに立ちこめている。彼女独特の時間の感覚、他人との距離感、そして冬の冷たさや夏の香りまでもが、読む者にぐざりと突き刺さってくるようだ。まるで彼女の身体に潜りこみ、彼女の五感と思考をもってこの世界を再



体験するような感覚。衝撃的な読書体験になった。

主人公はストックホルム大学で哲学を専攻する二十代後半の女の子。生まれ育った地方都市の息苦しさから逃げるように都会に出たものの、そこでも異邦人のような気がしている。寂しさを紛らわせるために、出会い系アプリ「Tinder」で常に大勢の男性とつながり、毎晩のように夜遊びを繰り返し、男の家について行つては、一夜限りの関係を結んでいる。

昼間は大学で、何の不自由もなくストックホルムで育つた年下の大学生たちを、教室の片隅から羨ましそうに眺めているエリース。その中でもエリースが心密かに憧れているのが美青年ヴィクトルだった。ひよんなことから彼と距離を縮め、信じられないことに恋人同士になる。しかしヴィクトルが自分い夢中になるにつれ、彼のことごますます知らない人のように思えるのだった。ついこの間まで遠くから見つめて憧れていた彼——しかし近づいたとたん、ちがうものになってしまった。エリースはその感覚に恐怖すら感じ、トイレでひとり鎮静剤を飲む。

タイトルのとおり刹那的で、自滅的な生き方を選んでしまう若い主人公。どうしても他の人のように「ちゃんとまとも」に生きることができない。せっかく手に入れた幸せを、自分から壊してしまう。本文中に病名が出てくるわけではないが、明らかにパーソナリティ障害を抱えている。

正式な恋人として、一緒に暮らし始めた二人。ヴィクトルはハンサムで爽やかで、礼儀正しく育ちの良い青年だ。仕事でも将来有望で、料理も掃除も得意だし、マンションのインテリアにもこだわり、記念日には必ず素敵なお料理を準備する。つまり読者からすると理想の結婚相手のような男性だ。しかしエリースはそんなヴィクトルに対する違和感が募るばかり。なぜシャツにアイロンをかけなきゃいけないの？ なぜソファでいたら食事しなきゃいけないの？ なぜ家じゅうにキャンドルを灯して、知り合いのカップルを呼んで、楽しそうに会話をし、ティナーを食べなきゃいけないの？ エリースは次第に息苦しくなり、薬の量が増えていく。素敵

レストランでプロポーズされたときは、二人とも幸せだった。とはいえエリースは、永遠の概念が彼と自分ではちがうことを認識している。彼女にとっての永遠はせいぜい五年くらいなのだ。それ以上先のこととは、どうしても考えられない。

エリースのような女性はこれまで、よく言えば「エキセントリックで芸術家肌の女性」として描かれてきた。悪く言えば、「精神的に不安定で、自滅するタイプ。不幸になるのは自業自得」といったところか。どちらにしてもわたしから見ると、同じ女性でありながらも、なぜそういう行動に出るのかがさっぱり理解できない存在だった。しかし本作を読んで、一分一秒がこれほどまでに自分とはちがう感覚なのだと思った。世の中には色々な人がいるのだ。そこで現実を引き戻され、改めて、自分の価値観だけで相手を評価してはいけないと自らを戒めた。

子供の頃から、読書というのは、自分とはちがった環境に置かれた人の考え理解し、共感を身に着ける手段だった。とはいえ本によっては主人公に共感

できなかつたり、ミステリアスな存在のままに終わってしまうものも多々ある。本書のように、新しい世界を垣間見る機会を与えてくれる本——そんな本に出逢ったときの感動は格別だ。

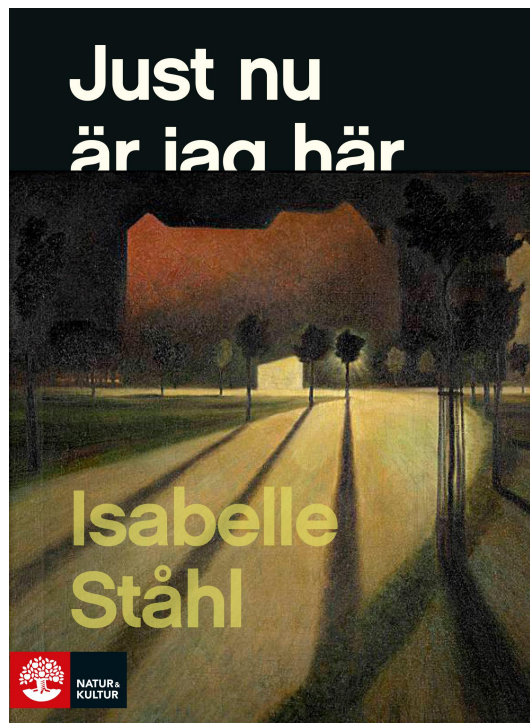
本作は、二〇一七年にスウェーデンの権威ある文学賞アウグスト賞にノミネートされた。



著者  
イサベル・ストール

若い女性主人公の  
生きづらさ——とい  
っても、セクハラや  
性差別とは別次元  
の、もっと内省的な  
独白。そもそも性別  
は関係あるのか？と  
も思ったけれど、や  
はり生きづらさの根  
底には「周囲からの  
期待、があるのだ。

(久山葉子)



- 原語タイトル Just nu är jag här
- 仮タイトル わたしは今はここにいる
- 著者名 Isabelle Ståhl  
イサベル・ストール
- 言語 スウェーデン語
- 発表年月 2017年5月
- ページ数 290ページ
- 出版社 Natur & Kultur

## 君たちの人生のABC

哲学者とジャーナリストが若者に送るてらい無き等身大のメッセージ

セルボ貴子

本書は、哲学者とジャーナリストの二人が若者向けに「人生のABC」をアルファベット一文字ごとに書いたものである。それぞれの文字でテーマを設け、見聞きニページ程度でその文字が考えさせる事を書いたもの。大人が上から目線で若者に言い聞かせる感じがしないところが良い。

哲学者アルノ・コトロは「(Lukeminen…読書)の項で本を読むことが大切である理由を十の項目としてまとめている。

一、知性を磨くことができる。ノンフィクションは

もちろん、フィクションも情報にあふれている。歴史小説がよい例だ。

二、視野を広げてくれる。今なら例えばユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』だろう。

三、インターネットは本の代わりににはならない。研究者も脳の働きは(一)素早いもの(計算などすぐ答えがでるもの)と(二)ゆっくりしたもの(熟考を必要とするもの、なんらかの物事についての考えを確立することなど)に分かれると言っている。今の世の中は(一)ばかりだが、なぜ気候変動が起こるか、これは脳の(二)の働きが必要だ。

四、読めば読むほど、書く力も付く。目が美しい文章に慣れ、自分で言葉を紡げるようになる。

五、想像力をはぐくむこと、他者を思いやること

…と続く。(六〜八は省略)

九、特に女子にもてたい男子へ、女子の方が本を読む。会話が続くぞ。

十、読書は楽しい。これに尽きる。

別のページで、コトロの書くF (*Filosofia*)の項目では、哲学は古代ギリシャやローマの石膏像の偉人の言葉を暗記して歴史を覚えるのではなく、人生とは何か、哲学とは何か、を自らに問い続けるもので、大人だからといって、すべての疑問に答えを持っていく訳ではないことを正直に書いている。また哲学は批判的な視点を持つこと、なぜ自分はそう考えるのかと疑問を持ち続けること。そして簡単に見つかると回答はないことも。また、回答が用意されているような問題はつまらない、と断言している所は小気味よい。

ジャーナリストのイェンニ・パースキューサリーの書いた内容は気軽に笑える内容も多い。たとえばZ (*Zumbarenba*)の項は、南米の音楽を使うダンス系エクササイズでの体験から始まっている。自分が一番前の列なのに曲の間中リズムについていけず、格好悪かったこと。続いて、人気番組の生放送司会中、突然三秒間頭が空白になり、カメラをぼーっと見つめてしまっただけに助けられた体験も記している。これらは誰もが経験する、できれば忘れてしまいたい瞬間だろう。しかし、失敗は小さな努力の積み重ねによって「自分で」乗り越えるしかないことを書いている。

また、母としての思いを綴ったA (*Aldilfasi*): あなたの母より)の項目も秀逸だ。娘への語り掛けの形式をとっており、娘が今の自分と同じ四十代になったときを想像している。クリエイティブな現場にいるが、二〇一七年、新たな職業、食物、乗り物が生まれ続け、二〇四〇年を想像することは難しい。

しかし彼女は強く願う。

「偽ることなく、自分らしくあれ。自分を性別が何であれ、受容できていくように。社会でアクティブな人間であれ。人の批判ではなく、自ら行動を起こせる存在であれ。世の半分を占める女性が、ペニスガぶら下がっていなくても、大統領や大企業の社長や、コメディアンや、シェフや、専門家になれるように。二〇四〇年には男性も素直に泣くことができ、一人でも社会から脱落する男子が減るように。誰もあなたの許可なく体に触れず、あなたも尊厳というものを理解しているように。そして私とあなたはまだ仲良しだと思おう」

長い引用だが、娘と若い世代への思いと憂いにあふれている。

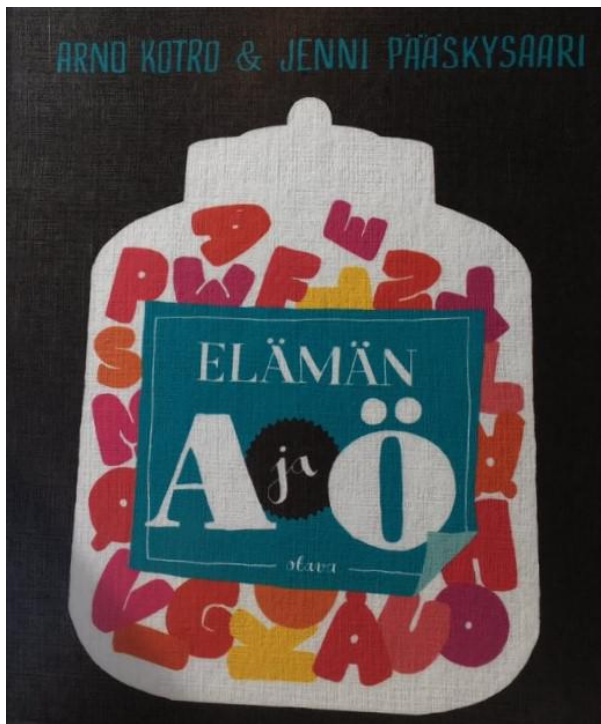
本書は A から Z という風に、アルファベット順に並んでいる訳ではなく、著者たちがそれぞれ書きやすい文字から早い者勝ちで選んでいったようだが、

読みにくさはない。結果 A、Q や X といった文字が残ったが、最後にはなんとかすべての文字を使い切りまとめられたようだ。

今回は多様性についての本を探して脱線した所で、若者向けの本書にいきついた。多様性を考える前に、若者が自己を客観的にそして主観的にも見つめ受容できることが大切だろう。人間は子どもであろうと、他人からの押しつけがましさはすぐに感じ取るものだと思ふ。大人のいかにもなお説教はうっとうしいけれど、本書にはその嘘っぽさ、飾ったところがまったくない。若い読者だけでなく、大人にも勧めたい一冊である。更に本を読みたくなること、請け合いだらう。

日本では子どもは未熟な存在として上から目線で語られがちですがこちらでは一対一の人間として相手を捉える場面によく遭遇します。迷える若者たちへの飾らず真摯なメッセージがいい大人の私にも届きました。

(セルボ貴子)



- 原語タイトル Elämän A ja Ö
- 仮タイトル 君たちの人生のA B C
- 著者名 Arno Kotro & Jenni Pääskysaari  
アルノ・コトロ、  
イェンニ・パースキュサーリ
- 言語 フィンランド語
- 発表年月 2017年4月
- ページ数 120ページ
- 出版社 Otava

生きている

シューアン・ウルリック・トムセン

訳 枇谷玲子

雨が腕に滴り落ちる  
生きている

電話が鳴っている  
手の中の受話器が冷たい  
生きている

泣く

首に手を当てる  
生きている

門が閉まる

壁の向こうで車が走る  
生きている  
服が汚れている

お湯が沸く  
生きている

あなたの声が聞きたい  
でもここにいない  
机に寄りかかる  
生きている

記憶が蘇る  
あの人のアパートの匂い  
海の近くの駅の風  
生きている

私は見つける  
古い詩を  
手紙を

回顧録を

十年

八年

七年

一年

生きている

オフィスに手紙を書く  
牛乳が酸っぱい

泣く

生きている

泣く

生きている



あなたの顔の顔

ベニー・アナセン

訳 枇谷玲子

違っていたらと

想像できるものはたくさんある

デンマークの夏

本やビール値段

政府

赤毛

コペンハーゲンの町

(でも今さらかな

コペンハーゲンはすでにすっかり様変わり

してしまった)

タイプライター

詩

世界

誰も違っていてほしいと願わない世界

平和な地球は想像がつかない  
創世記のような

たいていのものは

違っていたらと

想像できる

あなたの顔以外

あなたの顔が

違っていたらとは

思えない

今よりちよっぴりぽちちりしていたり、

痩せているぐらいなら

思い浮かぶが

あなたの顔に別の瞳がついていたり

別の人の唇からあなたの声が発せられたり

するところなど

想像がつかない

自分がこんなに保守的だったとは

世の中が変わってほしいと常に願っている私が

私はあなたの顔が

少し年を重ね

いや、ひどく古い、

百十五歳になるところは想像できる

髪が薄くなり

白髪が生えるところも

そういうのだったら

あなたの顔が

変わるところも

想像がつくけど

あなたの顔をあなたたらしめているものが

あなたの顔の個性までが

あなたの顔の顔が

違っているところは

想像ができない

そんなのは恐ろしすぎる

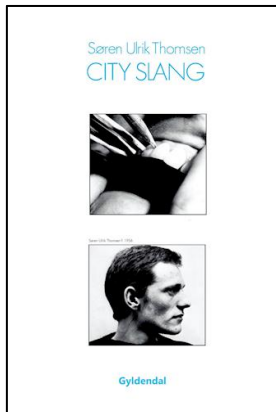
今のあなたがいい！

前半、トムセンはデンマークの谷川俊太郎。私が大学の文学ゼミで読んでいまでも心に残っている詩です。

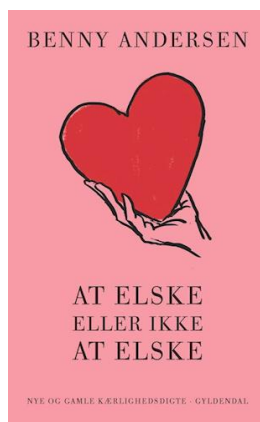
後半「あなたの顔の顔」はルッキズムの横行する日本に暮らす人達にぜひ読んでほしいと思い、訳しました。

(枇谷玲子)

- 原語タイトル CITY SLANG
  - 仮タイトル 都会のスラング
  - 著者名 Søren Ulrik Thomsen  
シュアーン・ウルリック・  
トムセン
  - 言語 デンマーク語
  - 発表年 1981年
  - ページ数 67ページ
  - 出版社 Vindrose
- 【書影は電子書籍版】



- 原語タイトル At elske eller ikke at elske
- 仮タイトル 愛するか、愛さないか
- 著者名 Benny Andersen  
ベニー・アナセン
- 言語 デンマーク語
- 発表年 2014年
- ページ数 78ページ
- 出版社 Gyldendal



## 立ち上がって「ノー」と言う、その方法はいくらでもある

社会を変える活動のためのハンドブック

よこのな

「抵抗」と題された本書は、何かを変えようとするひとたち、変えたいと思うひとたちのための本だ。民主主義は死んだ、投票率は下がっている、若者は政治に無関心だ。でも本当にそうだろうか？ もちろんそんなことはない。若者は社会に存在する問題に目を向け、さまざまな形で反応している。デモや街頭での活動だけでなく、肉を食べない、ポルノ反対キャンペーンをする、ファンジンを作る、といった活動方法だってある。それなのに、若い世代が何かをすると、「若くて怒っている」という言葉でひとまとめにされてしまう。そのことについても、

若い世代はフラストレーションをためている。

こういった状況を打破したい、若い世代が自ら語る、その声を聞きたい。それが、本書の著者である二人のフリージャーナリストたちが本書を執筆した理由である。

前半部分は、さまざまな分野で活動するアクティビストたちへのインタビューを中心に構成されている。後半部分は、活動のために知っておくべき実践的な事例をまとめたハンドブック形式となっている。本の形としては大判で余白も広く、特に後半部分は図版も多いが、内容はかなり硬派である。活動の

内容は、性差別、環境問題、人種差別、政治参加、障害者差別など、広い分野を網羅している。かなりラディカルな活動も多く、逮捕されたという人物も登場するが、なぜその行動に至ったのかという想いを自身に語らせるだけでなく、家族の気持ちまでもすくいあげている章もある。

後半は、「アクション、インターネット、キャンペーン、メディア、始動、権利、資料、連絡先」と実際のな見出しが並ぶ。活動に関する法律や、必要となる届け出なども具体的に示されている。

さて、本書が出版されたのは二〇〇一年一月。まえがきには「二〇〇〇年十一月」とある。二〇〇一年前半、ほぼ二十年近く前に世に出た本である、ということを中心に、書いてみたいことがある。

まずは、二〇〇一年という年について。その年の六月、スウェーデン第二の都市イエテボリでEU首脳会談が開かれ、それに対する大きな反対運動も計画された。そして結果的には、警備隊とデモ参加者の大きな衝突が起き、路上での警官による発砲で、

ひとりの少年が重傷を負った。街のあちこちで、高校生を含む、多くの若者が拘束、逮捕された。大混乱の中、宿泊所としてデモ参加者に開放されていた学校で拘束された者もいる。その後の裁判では有罪判決も下された。

それまでの反グローバリゼーション運動の中で最悪の事態が、よりによってスウェーデンという国で起こったことは、国際社会にもスウェーデン社会にも、大きな衝撃を与えた。また、本書で紹介されているような、社会を変えようとするさまざまな活動をどう捉えるのか、逆からいえば、どう捉えられしてしまうのか、その分水嶺となった事件でもある。わたしも当時、この一連の出来事に大きなショックを受け、調べたり考えたりしたが、二十年経ってもまだ宙ぶらりんな気持ちでいる。

ちなみに、本書は二〇〇二年に、イエテボリのことを取り上げた章を追加した増補版でペーパーバック化された。残念ながら絶版(※)で、わたしは未読のままである。

(※現在、著者のひとりのウェブサイトでPDF形式

で無償配布されている)

そして、二十年前と二十年後について。本書の内容は時代を感じさせるところもあるが、本質的には現在も有効である。たとえば「民主主義は死んだ、若者は無関心」といったフレーズは、残念ながらも今でもよく目にする。若い世代を「若い、怒っていない」と揶揄する状況も変わっていない。そして、自分のやりかたで社会を変えようとする若者がいることも、変わらない。

顕著などころでは、ひとりで学校ストライキを始めたグレタ・トゥーンベリさん。彼女の活動は一年足らずで世界中に広がり、多くのひとびとのところとからだを動かしている。ここに二十年という時間の大きさが感じられる。二十年前にはまだそこまで力にはならなかったツール、SNSが、活動を大きくバックアップしている。世界中の若者が活動を共有し、連帯感を高めている。

この本を取り上げようと思ったころ、アメリカで

出版された若い女性向けハンドブック『Girls Resist!』の日本語版が出ると知った。『世界の半分、女子アクティビストになる』（ケイリン・リッチ著、晶文社）という日本語題だが、「抵抗せよ！」と叫ぶ本が翻訳されるなんて、二〇一九年は最高じゃないか。わたしたちは進歩しているのかもしれない。本書のまえがきにはこうある。「こんなふうに考えるべきだとか、ここに出てくる人たちが絶対正しいのだとか、そうは言わない。わたしたちが言おうとしているのは、あなたがなにかをやらなければなんにも起こらない、ということ。変えることはできるのだ」そう、これは勇気の書なのだ。こうした本が日本語で著される、そういう日が近い将来に来ることを、わたしは強く願っている。

日々のちょっとした選択で意思を表明する。少しでもましな未来のためにそれぞれができることをする。その自由が認められる社会は、そうした小さな行動の実践によってしか保てないのだ、と痛切に思うこの頃です。

(よこのなな)



- 原語タイトル Motstånd
  - 仮タイトル 抵抗
  - 著者名 Jennie Dielemans & Fredrik Quistbergh  
イエニー・ディーレマンス、  
フレードリク・クヴィストベリ
  - 言語 スウェーデン語
  - 発表年月 2001年1月
  - ページ数 265ページ
  - 出版社 Bokförlaget DN
- 【※書影は増補版】

## デンマークの影の文化史

お洒落な北欧ガイドブックでは決して紹介されない酒場 (Væsthus) の歴史

種田麻矢

デンマークに存在する "Væsthus" とは、アルコールを提供する、一般的には古臭く、野暮ったい酒場として現在認識されている。パブとも違うし、バーや居酒屋も違う。日本で例えるなら、ママが経営している小さなスナックといったところだろうか。ここでいう酒場では、ビールが三〇〇円ほどの安さで飲め、労働者階級やアルコホリックな馴染み客が集う社会的地位が低い場所というイメージも浸透している。デンマークの法律では、店内の広さによって喫煙の規制が定められており、四十平方メートル未満であれば喫煙が許されている。そのような小

さな酒場の店内は、霧がかかったように煙草の煙が立ち込め、数分もしないうちに目がしばしばと滲みる。カーテンや壁紙は煙草のやにて黄ばみ、店内はアルコールの匂いが漂っている。時にはお酒がまわった客の大きな話し声が響き、時には理性を失った客同士の殴り合いが生じる。良くも悪くも、人間らしさが垣間見える場所である。

このような酒場は、外観や内装の色味から「茶色い酒場」とも呼ばれている。一九九〇年代後半に短期間で実施された都市改革により、古いアパートや酒場のほとんどが姿を消し、コペンハーゲンにはモダ



ンでお洒落で物価の高い町へと変貌した。近年ではレトロさに興味をもつ若い世代やヒップスターのあいだで注目されるようになるが、酒場文化自体は衰退する一方だ。

本書では著者自身が幼い頃から馴染みのあるコペンハーゲン・ノアプロ区に佇む二十八の酒場が紹介されており、一九七〇年代から八〇年代、そして現在の店内や客の写真や、店主の回想を通して当時の様子に触れることができる。

子どもが酒場に馴染みのあること自体、想像しただけでも道徳的な観点からして眉をひそめずにはいられないかもしれないが、著者にとって酒場が育った環境の一部だったのは、自分の父親に会いたくはいつでも酒場に行けば会えたからだ。大人の客に混じり、幼い著者はカウンターに座ってジュースを飲んだ。時には酔っ払って絡んできた、少し正気を失った娼婦の話の聞いたりもした。

このような酒場文化が消滅しつつあるなかで、著者は自分が幼い頃から知っている、またはそうでない酒場を訪れ、その様子を描写している。

※写真の一部は、著者ウェブサイトで見る  
ことができる。

<http://www.lunsignes.dk/bag-de-gule-gardiner/>

本書は、北欧のお洒落なカフェのガイドブックでは決して紹介されない、むしろ目を背けたくなるような文化やその足跡を、忠実にそしてユーモラスに、店主や馴染み客の声、そして写真を通して伝えていく。

酒場はお酒を飲む場所であるだけでなく、地域社会を象徴するものでもあり、それは本書で紹介されている酒場を営む店主の回想からもうかがうことができる。

馴染み客が数日顔を見せなければ、必ず店主が客に電話をして様子を伺った。よく知っている客同士はお互いの家の鍵を持ち、急にはたりと来なくなつた客がいれば、すぐ家に行き安否を確認した。実際にこの方法で、少なくとも二人の客が自宅で亡くなつていたことを確認している（アルコールが原因かは定かではない）。今では考えられないような地域社会の繋がりが、たった半世紀前までは当たり前前だったことも、この本を通して考えさせられる。

ファッションや社会学的な視点からではなく、酒場という場所が切っても切り離せない暮らしの一部となつていた市民、なかでも社会的な敗者、そして彼らを酒場のカウンター越しで見守りながら接客をしていた店主たちの視点を通して、デンマークの影の文化に触れることができるだろう。

かつて労働者にとって束の間の安らぎの場所であり、アルコールによって自らを破滅させる場所でもあったデンマークの酒場。私たちの多くが目を背けたいような社会の側面そして人々の悲哀や絶望が、古き良き時代といった面影の裏に存在していることを教えてくれる1冊です。

(種田麻矢)



- 原語タイトル Bag de gule gardiner
- 仮タイトル 黄色がかったカーテンの向こうで  
ーノアプロ区の酒場ー
- 著者名 Luna Signe Hørdum Nielsen  
ルナ・シーネ・フアドム・ニルセン
- 言語 デンマーク語
- 発表年月 2014年5月
- ページ数 240ページ
- 出版社 Nordstroms

## 社会階級の間を旅した男

北欧ミステリの重鎮レイフ・GW・ペーシヨンの自伝

久山葉子

あるとき、英女王の側近でもある人物が、伝統的な上流階級のハンティングを催していた。招かれた客の中には、スウェーデンの有名作家の姿もあった。晩餐会の席で美味しいお酒に会話が弾み、作家はなにげなく、自分が尊敬してやまない父親の話 시작했다。すると、そばに座っていたスウェーデン人の男爵が笑い出した。

「ずいぶんと慎ましいお父上だな。まさかきみがそんな家の出とは……」

それを聞いて作家は激怒し、男爵の襟首をつかんだ。「外へ出ろ。身体じゅうの骨を折ってやる！」

レイフ・GW・ペーシヨンの自伝である本書に、こんなワンシーンがある。ペーシヨンといえばスウェーデンでもっとも有名なミステリ作家の一人であり、犯罪学の教授として国家警察委員会の顧問を務めたほどの人物だ。テレビの犯罪番組でも長年ホストを務め、犯罪ニュースのご意見番として頻繁にタブロイド紙にも登場する国民的有名人である。

しかし、彼の父親は肉体労働者だった。

ペーシヨンは一九四五年にストックホルムで生まれた。両親はともに深い森に囲まれたノルランド地方の出身だが、父親がストックホルムの鉄道敷設工

事に職を得たため、結婚してすぐに首都に出てきていたのだ。母親は病気がちで、しかも虚言癖があつて精神的に不安定だつた。小学校に上がる前のペーシヨン少年は、母親が家でゆっくり寝ていられるように、父親に連れられて工事現場に通つた。父親の仕事仲間には可愛がられ、手先も器用で幼いながら工事の作業を手伝つていたという。

少年はきわめて頭がよく、いわゆる神童だつた。おまけにいたずらもしないお利口な子供だつたのに、小学校に上がると担任の女教師からいじめ抜かれた。その理由はただひとつ——彼が労働階級の出身だつたからだ。都心にある小学校のクラスメートはみな、中流階級の子供たちだつた。

中学・高校時代を過ごしたノツラ・レアル中等教育学校は当時男子校で、彼以外の生徒の親は医者や研究者など、知的階級に属する家庭の子供ばかりだつた。そもそもその頃は、女子や労働階級の息子が *Ladoverker* と呼ばれる中等教育学校に通うこと自体が珍しかった。この学校に通うことはペーシヨ

ンにとって大きなカルチャーショックであり、同時にこれまで知らなかった世界へと続く扉にもなつた。現在のスウェーデンでは、すべての子供たちに均等な教育の機会が与えられている。どれくらい均等かというと、小学校から大学まで私立も公立と同様に学費は無料だし、制服や修学旅行のように、学校が生徒からお金を徴収するということもありえない。完全無料にすることで、学内で社会格差が生まれにくいようにしているのだ。本人の意欲と能力さえあれば、親の経済力に関係なく、学びたいことを学び、さらに上を目指すことができる。

それは六〇年代から社会労働党が進めてきた教育改革の結果だ。特に一九八〇年からは、すべての子供のための学校」というポリシーが明言化され、入学試験(※)や授業料の徴収によつて入学する生徒を選抜することはしないし、学校内で成績別にクラスを分けることもない。つまり義務教育レベルではどの学校のどのクラスを覗いても生徒の知能レベルは様々だし、高校・大学へ進学しても親の職業は

様々だ。子供たちは多様な背景をもつ仲間と毎日机を並べて学び、共に成長していく。

(※高校・大学はそれまでの成績で上から入学が許可)

されるが、入学試験というものはない)

しかしペーシヨンの自伝を読むと、つい七十年前はそれが当たり前のことではなかったことがわかる。スウェーデンの教育制度はこれほどまでに変わったのだ。親の世代が再生産(リプロダクト)されていく教育から、すべての子供たちに等しいチャンスを与える教育へと。

何度も脳塞栓を起こしているペーシヨンは、いつ死んでもおかしくない——と思われるつも今までもしぶとく生きているのだが、彼が自伝を通して伝えたかったことはなんだろうか。『すべての子供のため』の学校ができる前に、自分の能力と努力だけでスウェーデンの社会階級を駆けあがった男が。

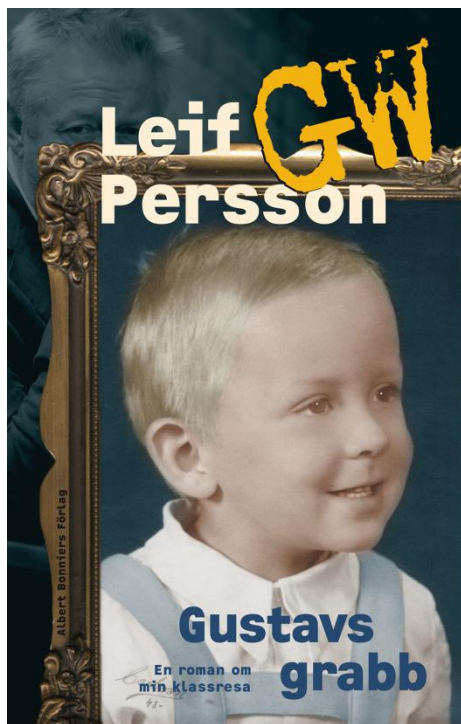
自伝のタイトルは『グスタフとこの倅』。華やかな経歴をもつペーシヨンだが、人生を振り返ってみて、その中でいちばん誇りに思っている肩書が

「グスタフとこの倅」なのだという。幼い頃、工事現場で父親グスタフの仕事仲間からそう呼ばれていたのだ。敬愛してやまない父親の息子であること——それが彼にとってのいちばん重要なアイデンティティだった。

今のスウェーデンの子供たちは、恥じることなく自分のアイデンティティを自負できているだろうか。いい年をしたオヤジは、父親の職業を見下されたときに素直に激高できるだろうか。できるのだとしたら、ペーシヨンがひとり孤独に闘ってきた時代は終わりを告げたのだ。男爵が労働者を見下していた理由など何もない——スウェーデンでは、そんな新しい時代が始まっていると信じたい。

スウェーデンの大学で教育学を学んでいて、教育のありかたには普段から興味を持っている。以前訳したミステリ『許されざる者』の著者の自伝を読み、たった一世代上の小学校であからさまな階級差別があったことに衝撃を受けた。

(久山葉子)



- 原語タイトル Gustavs grabb
- 仮タイトル グスタフんこの倅（せがれ）
- 著者名 Leif GW Persson  
レイフ・GW・ペーション
- 言語 スウェーデン語
- 発表年月 2011年9月
- ページ数 380ページ
- 出版社 Albert Bonniers Förlag

## 強制結婚させられた青年の苦悩

二つの文化の狭間での孤独、そして自由に生きることの大切さについて

羽根由

二〇〇五年、私がスウェーデンに来て間もないころ、あるスウェーデン人女性と知り合いになった。彼女は元教師で、移民の多い地区に住んでいた。ある日、彼女はその地区に住む移民女性を守る活動をしていると説明した。「どうして？ それは家族がやることではないのですか？」と私が質問すると、彼女は困ったような顔をしたが、それ以上の説明はしてくれなかった。

スウェーデンへ来たばかりの私は「名誉殺人」も「強制結婚」も知らなかった。娘の結婚相手は親が

決める。自由に恋愛する娘はふしだら。だから親族の名誉を守るために、不品行な娘は家族の手で殺さなければならない。そんな出身地域の習慣を持ち込む移民がいることを。

もっとも有名な犠牲者はファディメ・シャヒンダールだろう。クルド系移民の彼女は二〇〇二年、スウェーデン人の恋人がいることを理由に父親に射殺された。

父親が妙齢の娘を殺す？ それも付き合っているカレシが原因で？ 私にはまったく理解できなかつ



た。ファディメから最初に相談を受けた警察官もそうだったらしい。「家族とよく話し合うように」と言っただけで彼女を帰したそうだ。

強制結婚については夏休み前によくメディアで取り上げられる。「親戚に会うために」親の出身国に連れていかれた少女たちがそこで強制結婚させられ、秋になっても学校に戻ってこない例があるからだ。

強制結婚に反対するイギリスの団体 *Kanimo Ninona* の女性たちに対するアドバイスは「パンティにスプーンをしのばせない」。こうすると空港のセキュリティでひっかかり、別室で検査を受けることになるので、そこで助けを求めることができる。

私は上記で「女性」「少女」と書いたが、強制結婚や「名誉」を重んじる家族からの暴力の被害者には男性もいる。だが数の上では少数派なので見落とされがちだ。だからこの自伝的小説『星のない夜』

が世に出たとき、「強制結婚させられた青年の運命」に注目が集まった。

アマールは十九歳。高校を卒業し、アメリカで一年働いた経験がある。両親ともクルド系難民だが離婚している。五人のきょうだい（姉弟）と強烈な個性をもつ父親がいる。数年ぶりに父や弟たちとイラクにいる親戚を訪問することになった。そこで美しくなったひとつ年上の従姉アミーナと再会する。最初は親戚たちの歓待を喜んでいたが、やがて彼は周囲から「アミーナと結婚するように」とのプレッシャーを受けるようになる。

ここでアマール青年はいくつものカルチャーギャップを経験する。スウェーデン育ちの彼にとって、自分が使った食器を台所まで持っていくのは当然のこと。しかし、おばたちは、それは女の仕事だと言いつつ、彼を台所から追い出す。

恋愛結婚したいと言えば「愛情なんて後から湧いてくる」。自分の意思で生きたいと言えば「父親のいうことが聞けないの?!」。

そこへ父親が仮病を使い、「彼の病気の原因はお前だ」と親戚になじられたアマールは「わかったよ。従姉と結婚する」と答える。もうすぐスウェーデンに帰れるんだから。

しかし、その翌日、家に親戚縁者とイマーム（イスラム教の指導者）が集まり、結婚式がおこなわれてしまう。結婚の誓いが、花嫁の父と花婿の間で交わされた——花婿の父の強制で。

アマールと一緒にスウェーデンに戻った父は、息子にこう命じる。「移民局で手続きをして、アミーナを妻としてスウェーデンに呼び寄せるように。働いて、アミーナの父親にお金を送るように」

アマールは仕方なく郵便局で働きはじめる。「映画監督になりたい」という将来の夢は潰れてしまった。

帰りたくてたまらなかったスウェーデンでもアマールは孤独を感じる。「結婚したことを、友達にどう説明すればいいのだろうか?」

本書の特徴は、「わかってもらえない」主人公の孤独感を鋭い感性で描いていること。「自由に生きたい」という意思をクルド文化ではわかってもらえず、男性も強制結婚の被害者になるのだということをスウェーデン人にはわかってもらえない。

二〇一一年にこの自伝的小説『星のない夜』を出版した後、アサードは警察庁や自治体との協力や講演活動を通じて、強制結婚の反対を訴え、自由に生きる権利の大切さを説いている。誰かが告発し、社会を教育しなければならぬ。空港で怯えた少女（あるいは少年）が保護されるように。警察に相談に行った若者が「家族と話し合うように」と帰されてしまわないために。



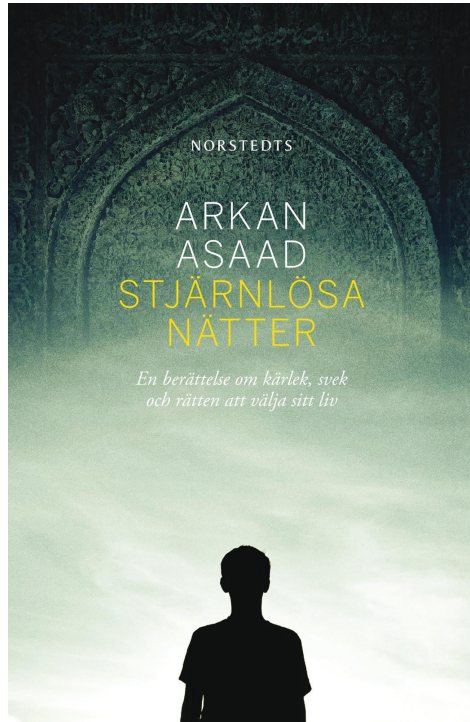
Fotograf: Hugo Thambert

著者アルカン・アサード

著者のアサードは一九八〇年生まれ。一九八四年にクルド系の家族と共にスウェーデンへ。スウェーデンではテコンドーのチャンピオンになったこともある。ストックホルム映像学校を卒業し、ラジオ番組の製作にも関わった。本作の続編に『血は赤より赤い』（二〇一四年）、『輝く太陽の向こう側』（二〇一八年）がある。

家（親）のための結婚というのは、第二次世界大戦前の日本にもあったかもしれませんが、現代でも世界のかなりの地域でおこなわれていること、移民先の若者でも犠牲になることが、私にはショックでした。

（羽根由）



- 原語タイトル Stjärnlösa nätterna: En berättelse om kärlek, svek och rätten att välja sitt liv
- 仮タイトル 星のない夜：愛と裏切りと自分の人生を選ぶ権利について
- 著者名 Arkan Asaad  
アルカン・アサード
- 言語 スウェーデン語
- 発表年月 2011年1月
- ページ数 250ページ

## 北欧の先住民族サーミ、その沈黙の風景

二十世紀スウェーデンの同化政策をサーミの側から語る叙事詩

ヘレンハルメ美穂

本書はスウェーデンの権威ある文学賞、アウグスト賞を獲得したのだが、北欧の先住民族サーミを描いた長大な叙事詩と聞いて、まず思ったのが、「叙事詩っていまの時代でもありなんだ……」ということだった。古代のものというイメージがあったので……。

だが実際に読んでみたところ、この作品は詩でなければならぬ、詩だからこそ力強く伝わってくるものがある、と感じた。

本書のタイトル *Ednan* は北サーミ語で土地、

土、地面などといった意味だという。著者リネーア・アクセルソンは一九八〇年生まれ。母親がサーミで、本書の主な舞台であるポルユスの町で育った。

物語はふたつの家族を軸に展開する。ベルリョーナとリスティンの夫妻はトナカイを放牧し、夏はノルウェーの最北へ、冬はスウェーデンへと、国境を超えて自由に行き来していた。ところが二十世紀初頭に国境が閉ざされ、さらに水力発電のためダム開発が始まると、一家は馴染んだ土地から引き離され、町のアパートへの移住を余儀なくされる。夫妻には

息子がふたり生まれたが、上のアスラットは事故で命を落とし、下のニーラはいままでいう自閉症で、精神科病院でその生涯を終えることになる。

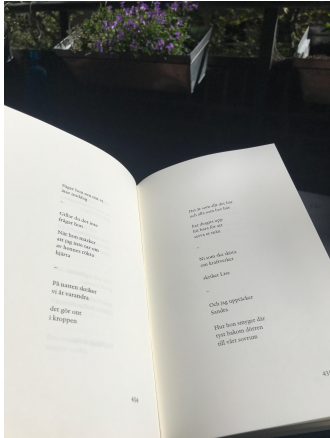
数十年後、ベルリヨーナとリスティンのかつてのアパートで暮らしているリーセは、一九五〇年代に少女時代を過ごし、サーミの子どものための寄宿学校に通った。サーミ語を禁じられ、サーミの文化を否定されて育った世代だ。

それからまた数十年後、リーセの娘サンドラの時代には、失われかけたサーミ文化が見直されはじめている。サンドラはサーミの血を引いていることを自分のアイデンティティーの重要な一部ととらえ、自らサーミ語を学び、サーミの権利や伝統を守ろうと活動する。彼女は母の経験を知り、サーミ語についての質問をするが、リーセは答えることができない。

なぜ詩でなければならぬと感じたのだろうか？  
一種のエキゾチズムだろうか、とはじめは思った。

叙事詩という原始的でアルカイックなものと、先住民族という存在を、安易に結びつけようとしていないか？ 正直、そういう偏見が自分の中にまったくないとはいいきれないと思う。が、ここではそのほかの可能性を探ってみよう。

ふだん文字で詰まった本ばかり読んでいる私にとって、本書は詩ならではのページの余白が印象的だった。そこには沈黙がある。大地と空の広がり、静けさが想起される。理屈ではない、人と土地とのつながり。そして、そのつながりを奪われるサーミの姿が、くつきりと浮かびあがってくる。



”沈黙“はこの作品においてたいへん重要なテーマだ。上にも述べたとおり、サーミは母語を禁じられ、沈黙させられてきた民族である。ほぼ一生、ずっと口をきくことができなかった自閉症のニーラはその象徴だろう。そして二〇一五年、老いたリーセは、ポルユスにやってきた中東からの難民に出会い、自分が失った母語に思いを馳せる。言語や土地など、失いたくないものを奪われる経験をしている人々は、いまも世界中にいるのだ。その意味で、これはサーミの叙事詩であると同時に、普遍的な人類の物語でもある。

もうひとつ、重要な問いかけがある。人には、とりわけマイノリティーに属する人々には、自分の物語を語る義務があるのだろうか？ 沈黙する権利もあるのでは？ 本書では活動家のサンドラが母のリーセに、自分の来し方を語るべきだと迫る。だが、リーセには戸惑いがある。彼女にとってサーミであることは、ひとくちに語るには複雑すぎることなの

だ。そういう人に、語れ、と迫るのは、暴力にほかならないのではないか？

そもそも、私たちは人生の”物語“を語れるのだろうか？ 実際の経験を物語にするとき、人は取捨選択を強いられる。因果関係の鎖をつくり、なんらかの締めくくりを用意せざるをえなくなる。だが現実の人生は、じつは線的な物語ではなく、さまざまな経験の断片の集合であって、むしろ詩のほうに親和性があるのではないか。それらを取捨選択し、物語として組み立てて語ろうとしても、そうする力を、言葉を持たずに、沈黙してしまう人が大多数なのでは？

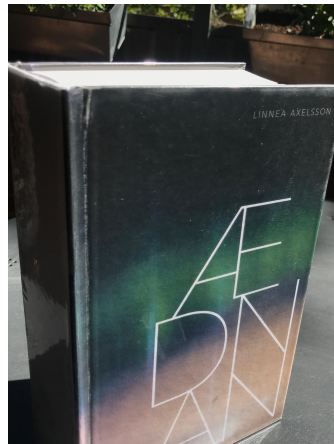
二十世紀のサーミ同化政策の歴史を散文の物語として描くこともできたはずだが、アクセルソンはそうはしなかった。代わりに、その歴史の中で実際に生きた人々、沈黙させられてきた人々のエモーショナルな風景に焦点を当て、詩として提示してみせた。

スウェーデンでは近年、サーミの側から語られる歴史・文化への関心が高まっている。二〇一六年に映画『サーミの血』が話題になり、二〇一七年にはサーミ文学フェスティバルが始動、二〇一八年のヨ―テボリ・ブックフェアでは、複数のセミナーでサーミ文学の翻訳が話題にのぼっていたのが印象的だった。

マジョリティーに属する人々は、自分たちが歴史を通じてマイノリティーを沈黙へと追いこんできた側であることを、けっして忘れてはならないし、その声を勝手に奪ってはいけないのだと思う。ただ、ひたすら耳を傾けること――沈黙にすらも。言葉から沈黙が伝わってくるというのは矛盾するようだが、まさにその逆説を体現している、稀有な作品だ。

これは北欧のサーミの話ですが、けっして他人事ではありませんよね。たとえば、アイヌの声はいま、どうなっている？ エキゾチックな文化として消費するのではなく、歴史と向き合い、耳を傾けているかどうか？

(ヘレンハルメ美穂)







- 原語タイトル   Ædnan
- 仮タイトル     エードナン 〈大地〉
- 著者名         Linnéa Axelsson  
                  リネーア・アクセルソン
- 言語            スウェーデン語
- 発表年月       2018年2月
- ページ数       763ページ
- 出版社         Albert Bonniers Förlag

金曜の夜、スーパーマーケットで  
マリアンネ・コルダ・ハンセン 訳 枇谷玲子

このスーパーにいる人たちには皆  
帰る家があるのね

家で誰かが待ってる

買い物カートをのぞけば分かる

どのカートも

安定と所属と健やかさに満ちてる

安売りの骨付き豚首肉

ドックフードにスナック菓子

土曜子どもにあげるおやつ

ワイン2リットルにベイクド・ポテト

ジャンボ・パック——お徳用——

ファミリー・パック

オムツにフランス産チーズ

ニット・キャップをかぶり

ストライプのエコバックを提げた

でっぴりしたくたびれ女

初々しいママさんたち

髭の男性

セレブ妻

若いカップル

上着を羽織っていない人も

ということには外に誰かが車を停めて待っているのね

待ってくれている人が、皆にはいる

そこに私がこのこあらわれましたとさ

半リットルの低脂肪ヨーグルトと

小袋入りのライ麦パンをカートに入れて

金曜の夜のスーパーマーケットでしか許されない

ような

だらしなない恰好で

愛されないって、こんなにはつの悪いことなのね

誰がどう見ても、私は愛されていない女

誰も信じやしない

私の夫は旅行中なんだって

子どもたちは今週末、

おじいちゃん、おばあちゃんの家泊まりに

行っているって

私はたまらず列を離れ

英国産のステーキ肉と

高級な赤ワインと

ジャンボ・パックのライ麦パンと

男物の靴下三組と

卵六個

クッキー二袋に

コンドーム十個

おしゃぶり四つ

おむつ四十枚

牛乳一リットルと

アフター・シェーブローション

皮付きの冷凍エビをかごに入れた

高い買い物

そうして私は列に戻った

どうかしてる

でもない

これでさっきよりはずっと

他人とちゃんと目を合わせられるから

不安 マリアンネ・コルーダ・ハンセン

訳 枇谷玲子

私、夜、眠れない

ベッドに入るとたちまち

不快な思考が

疲れ切った頭に浮かぶ

私はすっかり目がさえてしまつて

体はこわばり緊張してしまふ

夜に投げ出され

溶けることなく漂う異物みたいに

闇の中で横たわる

子どもに何かあつたらどうしよう？

夫に捨てられたら？

夫も私も職を失つて

家を手放さなくてはならなくなつたら？

戦争がはじまつたら？

癌になつたら？

この間、胸を片方切除した叔母みたいに

耳にするあらゆる暴力、犯罪、汚染のことを

考えるともう耐えられなくなる

だけど考えずにはいられない

世の中は私なんか見向きもしないのに

暗闇は私を脅かす

そこで私はリビングに行き、

電気をつけ、ジン・トニックを呑み、

怖いものリストを書きはじめた

死

戦争

火事

病

人口爆発

強盗

核兵器の脅威

蜘蛛

テロリスト

私は怖い

年をとるのが

魅力的でなくなるのが

無力で

太っていて

忘れ去られ

孤独で

馬鹿にされ

物忘れが激しく

笑いものにされ

だめだ

全部書ききれない

頭の中で思い描くことも、ままならないぐらい

優先順位をつけねばならないのでしよう

危険をいくつか選んで

それ以外のことは気に病むべきじゃない

でも一番恐れるべきなのは何？

戦争？

癌？

認知症？

離婚？

選べない

とはいえ、週に三つ選んで

日曜がきたらまた別の三つを選ぶことはできるかも

でも、夫の浮気と空き巣とテロリストを選んだ週に  
火事にあつたらどうしよう？

そうしたら私の選択が間違っていたってこと  
こんなに危険だらけの世の中で

私は闘い抜くことなどできっこない

だったら大人しくベッドに戻った方がいい  
私にできることなどないのだから

思っていたより、事態は深刻みたい

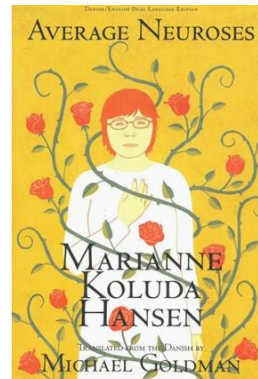
でもなぜか心はさつきより晴れてる

多様性に寛容になるの  
は、実はとても難しい。

人は他人を規範に押し  
込めようとする。規範に  
押し込められる苦しさを  
この詩人は見事に表現し  
ています。

(枇谷玲子)

- 原語タイトル Average Neuroses
- 仮タイトル 平均的なノイローゼ
- 著者名 Marianne Koluda Hansen  
マリアンネ・コルダ・  
ハンセン
- 言語 英語・デンマーク語
- 発表年 2017年
- ページ数 172ページ
- 出版社 Spuyten Duyvil Publishing



## マダムC

弱者の立場を擁護しながら徐々に文筆家として才能を発揮するまで

セルボ貴子

本書は、ミンナ・カントウ生誕百七十五周年となる二〇一九年にあわせて前年秋に出版された作品である。ミンナ・カントウは、フィンランド最初のフェミニストとして、また劇作家としても有名だ。一八四四年生まれ（作曲家シベリウスより二十三年前に生まれている）であることから、幼少期や若い頃についてはそれほど知られていない。

作者ミンナ・リュティサロはフィンランド北部に住む高校の国語教師で、心に秘めていた作家としての夢を二十年経ってやっと実現した。本書は彼女の

二作目にあたり、さすが国語教師らしく、美しい文体と言葉の選び方は既に定評がある。「一発屋」でなくこれからも存在感ある小説家となるだろうと期待も高い。

ミンナ・カントウについての史実は生年、場所、家族構成などを作品の骨格として踏襲しながら、実際はどういう人生を送ったのかというストーリーを豊かな想像力で肉付けし、紡いでいったのが本書である。従って読者は評伝としてではなく、あくまで純粋に読み物として当時に思いを馳せ楽しむのが良

いだろう。

もともとカントウは労働者階級の両親の元に生まれたが、父親は仕事の腕を認められて、中南部の工業都市タンペレにて、工場の雇い人という立場から東部のもう少し小さな町クオピオに送られ、そこで新たな拠点を立ち上げ紡績業を営むようになった。したがって家族はおおむね生活に困ってはいなかったようだ。家族の間柄も近しいものだったことが伺える。また秀才である娘にすっかり教養をつけたい、という先見の明も父親にはあった。(その後はいい所に縁づいてもらいたいという、父親らしい考えがあったようだ)

そんな中、フィンランドで初のフィンランド語国語教員養成課程が設立された。場所は中部地方のユバスキュラ大学で、合格した若者が集められた。この背景には、それまでの高等教育はスウェーデン語で受けていた歴史的な事情がある。フィンランド語教育の父と呼ばれるシグナエウス教授の一声による

ものだった。全ての国民に、貧富や階級の差なく教育を提供しようという機運が高まって来ていたのだ。そこへ全国から初めて、女子学生も含めて若者たちが集い、学び、悩み、成長していく。ミンナは同じコースの自然科学の講師であったフェルディナンド・カントウと恋に落ち、二人は結婚する。

夫はこの時代にしては非常に珍しく、ミンナを励まし、彼女の才能と声が社会に届くよう支え続けた。百五十年前にこんな夫がいたのかと思うほど、思いやりにあふれ、できた人物であったようだ。幸せな家庭生活、子宝にも恵まれ、七人の子どもをもうけた二人のほほえましいやりとりの様子があちこちに描かれている。

しかしながら、幸せ過ぎると人間は刺激を求めてしまうのか、ミンナは退屈さも感じたようだ。平和な家庭におさまるだけでなく、自分も何かを成し遂げたいという思いが彼女の心の中で大きくなっていった。使用人の手を借りつつ子育てをしながらも、夫が編集者をしていた地方新聞に、貧困にあえぐ



人々の人権や女性運動について記事を書いたり、短編小説を執筆したりし始める。しかし一八七九年、三十五歳の若さでミンナは未亡人となってしまいが、この辛い時期を乗り越え、夫の死後数か月にしてミンナは初めて演劇の脚本を書き上げる。

ミンナ・カントウについては代表作『労働者の妻』など演劇や小説などに彼女の女性人権運動についての主張が色濃く反映されている。従ってそういう面をこの作品にも期待した読者はもっと彼女のやり遂げた事、つまり女性の地位向上を獲得していくという今でさえ容易ではない事への最初の道筋をつけた人物として、その葛藤などを読みたかっただろうし、そのあたりがしっかりと書きこまれていない点はおそらく失望するだろう。(ただしフィンランド人読者の場合。日本ではあまり知られていない為) 実際これから名が知られていくという段階でこの物語は一つの事件があり、そこで終わる。その内容についてはここで言及しないが、読者の想像にその後

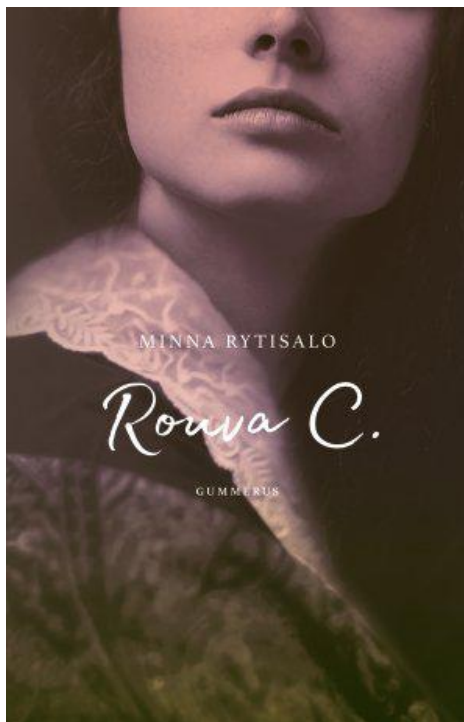
の彼女の人生が委ねられているようだ。もちろん、いつ、どんな作品を発表したかは今でも作品に親しむことはできるけれど、リュティサロの描くミンナとして、実際の活躍の裏側を読んでみたかったと私も思った。

物語の最後に、再度「本書はフィクションであり、あくまで作者が作りあげたミンナ像である」と念押しされている。ミンナ・カントウについては、前述のように史実以外の生活についてほぼ知られていなかったが、本書では、当時の中南部工業都市であるタンペレ、ロシアの国境近いクオピオや中部ユバスキュラの時代考証が良くなされていて、日常生活のちよつとした場面やしぐさ、言葉の端々に当時の様子が読み取れる。大学のコースで隣り合った青年とは、男女が初対面の際は第三者が紹介しなくては直接会話をするのははしたないとされていた当時の常識も描かれ面白い。これらディテールが非常にうまく配置され、読みながらその時代に思いを馳せた。

ミンナの生きた時代から百五十年前後、日本では #MeToo や #KuToo があり、日本でも女性がだんだん声を上げてきているが、まだ雰囲気的に突き抜けられない空気が感じられる。何も気にせず、性別に限らず自分が自分らしくあれど時代は自分が生きていくうちに日本に来るのかと読了後、しみじみと考える。

フィンランドの誇るフェミニスト、弱者を擁護した人についての小説。私達が今こうして好きなように学び、社会に出ることができるのはミンナや、ブルーストッキング、ヴァージニア・ウルフ、日本の「青鞥」そして幾多の先人のお陰だと改めて思います。

(セルボ貴子)



- 原語タイトル Rouva C.
- 仮タイトル マダムC
- 著者名 Minna Rytisalo  
ミンナ・リュティサロ
- 言語 フィンランド語
- 発表年月 2018年9月
- ページ数 367ページ
- 出版社 Gummerus Kustannus

オトちゃんがスウェーデンに生まれていたら…？

障がい者の自立と、福祉国家の光と影

著者のミカエル・アンデションは一九六四年生まれ。スウェーデンの乙武洋匡（一九七六年生まれ）さんと呼んでもいいだろう。先天性四肢欠損という重度障害を持ちながらも十九歳で自動車運転免許を取り、恋人の住む遠隔地へ引越し、仕事を見つけ、結婚し、四児のパパとなり、現在は講演会講師として活躍している。

本書と『五体不満足』はどう違うのか？ 彼は障害がもたらすつらいこと、悔しいことも率直に書いている。そして、不屈の精神でひとつひとつ乗り越えていく姿も具体的に描かれている。



羽根由

本書は、苦境を乗り越える個人の物語であるとも、一九六〇年代から二〇〇〇年代にかけてのスウェーデン社会の様子をも伝えている。この書評では、「身体障がい者に対する、福祉国家の光と影」を紹介したいと思う。

【施設に預けられるのが当たり前】

アンデションが誕生したとき、産院の医師は彼の両親にこう言った。

「この子のことは忘れて、新しい赤ちゃんを産みなさい」

「このような子は施設で育てられるのが一番なんです」

一九六四年当時のスウェーデンでは医師の権威は今以上であった。そして父親が消極的だったこともあり、両親が息子を自宅に引き取る決心をするまで一年かかった。

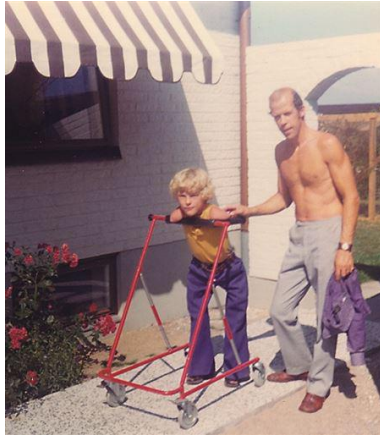
茨城キリスト教大学助教の清原舞の論文によると、

「一九五〇年代頃までは（略）障害のある子どもは、幼いうちから施設に入所させられたが、この決定には、医師や行政、専門職員の職権的な指示による影響が大きかった。（略）医師は、障害のある子どもが生まれると、両親に子どもを手放して、その子どもを忘れるようにアドバイスしてきた」そうである。一九六〇年代になってもその風潮が続いていたのだろう。

【電動車椅子が与えられない】

幼稚園から電動車椅子を与えられていた乙武洋匡さんと違い、アンデションは高校に入るまで電動車椅子が与えられなかった。その理由は、義手・義足が使いこなせなくなるから。彼の子ども時代、身体障がい者は義手・義足を使い、外見上「普通に見える」のが望ましいこととされていた。そのためアンデションは定期的に施設に送られ、そこで寄宿生活を送り、義手・義足のトレーニングをさせられた。実際には、義手・義足なんてないほうが何でも上手

にこなせたというのに。だがアンデション少年の意見は聞き入れられなかった。当時のスウェーデン社会では義手・義足の開発に大金が投じられていたのだ。



以上、書評筆者が「福祉国家の影」と感じた個所だが、これからは「福祉国家の光」の部分を紹介したい。

#### 【普通学校に行くのは当たり前】

アンデションの知能は普通の子どまと同じだった。だから当然、普通の小学校へ進学した。学校生活は母親の負担ではなく、スクール・アシスタントが付くことによって実現した。

日本の同様の身体障がい者、乙武洋匡さん、白井のり子（一九六二年生まれ）さん、佐野有美（一九九〇年生まれ）さんのケースはいずれも、母親が学校に付き添うことが条件だった。日本では母親の犠牲がないと身体障がい児は普通学校に（白井さんの場合は学校そのものに）通えない実態があるのだ。

#### 【運転免許を取得】

高校を卒業するとすぐに、アンデションは身体障がい者用の運転免許教習所（寄宿制）に入所した。その前に数回、教習所に通い、自分の要望を伝え、中古車を改造してもらっていた。そして免許取得後には、車椅子も載せられるようにトミニバンを改造した車を手に入れている。教習やマイカー購入にか

かった費用について本書に記載はないが、おそらく何らかの公的な補助があったのだろう。これも福祉国家の面目躍如たるエピソードである。

【一人暮らしができる】

アンデションは二十一歳のとき（一九八五年）に親元を離れて一人暮らしを始める。施設ではなく、アパートでの自立した生活だ。

「親から独立するのは当たり前のことだろう！一生、ママと暮らすつもりか？」友人たちはこう言う。ちょうどその時、市が身体障がい者用のアパートを建設していた。中庭を挟んでヘルパーの事務所があり、入居者はサービスを受けられるという。この時のスウェーデン社会は、障がい者を隔離するのではなく、一般の人と同じように生活できるようにとの政策に舵を切っていた。

以上、福祉国家スウェーデンの光と影をテーマに、本書から抜粋した。

本書の出版から約十年後の二〇一九年三月、アンデションは自分の子育てを振り返った本を出版している。

【参考文献】

清原舞 「身体障害者福祉政策の歴史的展開」

『桃山学院大学社会学論集』第四十五巻第二号、

二〇一二年。

乙武洋匡 『五体不満足』、講談社、一九九八年。

佐野有美 『手足のないチアリーダー』、主婦と生活社、

二〇〇九年。

白井のり子 『典子五〇歳 いま、伝えたい』、光文社、

二〇一二年。

福祉先進国スウェーデンでも、最初から当事者にとって理想的な状態であったわけではなく、社会は紆余曲折を経て、当事者にとって望ましい制度を確立してきたことが窺える自伝です。

(羽根由)



- 原語タイトル Armlös, benlös men inte hopplös
- 仮タイトル 腕なし、脚なし、でも  
希望／跳躍がないわけじゃない
- 著者名 Mikael Andersson  
ミカエル・アンデション
- 言語 スウェーデン語
- 発表年月 2009年9月
- ページ数 270ページ
- 出版社 Norstedts



## 北欧ブッククラブのご案内

北欧の本をみんなで読んでおしゃべりする会です。

北欧5か国まんべんなく、ジャンルもさまざまな書籍を、毎月1冊ずつ課題書として設定し、その課題書について、facebookグループでまったり感想を話し合ったり、疑問に思ったことについて話し合ったりします。課題書は参加者からの提案および投票によって決めます。TwitterやInstagramなどで、「#北欧ブッククラブ」ハッシュタグを使い、課題書についての投稿をする、という形での参加も歓迎です。

### これまでの課題書(2019年度)

- 6月 デンマーク・ミステリ  
『樹脂』 エーネ・リール
- 7月 スウェーデン・ノンフィクション  
『リンドグレーンの戦争日記』 アストリッド・リンドグレーン
- 8月 ノルウェー・フィクション  
『蜜蜂』 マヤ・ルンデ
- 9月 フィンランド・その他  
『ムーミン谷の夏まつり』 トーベ・ヤンソン
- 10月 アイスランド・ミステリ  
『湿地』 アーナルデュル・インドリダソン

### facebook グループ

<https://www.facebook.com/groups/2204507119766754/>

### Twitter アカウント

<https://twitter.com/hokuobookclub>